

同窓会報

都立大学附属高校誌
同窓会 目黒区八雲内
発行所 1-1-2 同窓会
新制 (717) 0749
責任者 内野滋雄
編集者 森田尚修
金子修一

「同窓会総会」報告

鰻目恒夫(1期)

昭和四十八年十月七日午後一時より午後四時迄の三時間に互って都立大学の講堂において「同窓会総会」が開かれました。当日は折悪しく朝から小雨模様で出席者の出足が心配されましたが、総数で一八三名の多数の方が参加され、特に第六期生(昭和三十一年卒業生)の出席者は二十六名の多きに達しました。

- 一、経過報告 内野君(1)
- 二、来賓挨拶 元木教頭
- 三、議事 議長 鰻目君(1)
- (一) 会計報告 須田君(8)
- (二) 会則審議 平岩君(2)
- (三) 会費値上 野口君(4)

- 四、役員選出 金子君(18)
- 四、講演 司会 伊藤君(3)
- (一) 日本が直面する経済問題 N H K 報道部 芝辻君(1)
- (二) 私の見たソ連 朝日新聞記者 長井君(4)
- 五、ビール・パーティー

経過報告は、この会報の別稿に書いてある通り、都立大学附属高校同窓会が三、四年来実質的に崩潰状態になって以来、今日同窓会総会を開くに至った経過と、再建同窓会準備委員会としての今後進めたい事業のあらましについて説明されました。

来賓の都立大学附属高校教頭の元木先生からは、お祝いと今後の同窓会の発展について御挨拶があ



りました。議事に入って会計報告は、この稿末に記されている金額についての報告があり会則及役員については同封の同窓会名簿の巻初に記してある案について審議され、又会費値上については、昭和四十九年度都立大学附属高校新入生(昭和五十二年卒業生)より従来の月額七十円から月額百二十円にする案

〈1973年度(72・10~73・9)決算報告〉

1. 収入の部	4,980,640
繰越金	4,160,243 (信託・定期・普通)
金利	87,077
会費(第23期)	733,320 (70円×36ヶ月×291人)
2. 支出の部	484,379
名簿準備費	167,205 (葉書・追調査・原稿)
会報15号	206,174 (印刷・発送)
総会案内	61,000
記念祭費補助	20,000
事務費(21~23期)	30,000
3. 次期繰越金	4,496,261

—以上—

について説明され、いずれも賛成者多数で可決されました。

講演会に入りまして、N H K の報道記者で、特に経済関係のニュース特集によく出演されている芝辻君より、「インフレはどうなるか」という極めて身近な問題について、ユーモアにあふれ、或は長年の海外生活を通じて日本人と外国人の生活経済に関する考え方の比較等興味深い話題を提供されました。

又元モスクワ特派員であった長井君からは、ソ連という社会主義国

家の取材の難しさや、或はモスクワにおける記者生活の裏表、記事にならない話等をせられ、両君の話は其々参会者多数の満足の内に終りました。

最後に、同じ講堂の中でカンピールによるパーティーが開かれ、古い寮歌から新しい応援歌まで、それぞれ年代毎に壇上で高吟され、校歌の全員合唱で、三時間に亘る会がなごやかな中に終了の幕を閉じました。

同窓会再建を祝う

内 野 滋 雄 (1期)

昨年十月七日、久しくとだえていた同窓会総会を開くことができた。これは、斉先生はじめ各期の委員の献身的な努力によってなつたものである。

あいにくの雨にもかゝらず、予想をはるかに上回る一八〇名の出席をえ、大成功であった。会員の皆様からそれまでの労苦をねぎらわれ感謝されたことで、委員諸氏も大いに報われたことと思う。

総会議事では、それまでの経過報告、会計報告など、報告に続いて今後の事業計画、予算、会費値上げ、会則設定などの協議を行ったが、全て原案通り可決され、また新役員も決定した。

旧師のご参会を得たことは、嬉しいことの一つだったが、松岡先生が個展を開かれたりして活躍しておられるお姿をそのまゝに見せて下さり、ファイトあふれるお話を聞かせて下さった。皆感動したことだろう。

一期の芝辻正昭君、六期の長井康平君が、実に面白い講演をしてくれた。同窓生が第一線で活躍し

てくれていることは誇りである。

ビールパーティーは一期の窪田季雄君(キリンビール)のお世話で賑やかに終始した。

名簿発行の件でおわびしなければならぬことはつらい。全委員の協力を得ながら、一人の不心得者のためにおくれてしまった。委員の中には印刷、出版業界の方も多く、適任者を選んでおまかせしたのだが、総会に間に合わないどころか、紙不足、物価値上に巻きこまれてしまった。現在、小林行昌(一期)、野口貞義(四期)、杉浦清子(十期)君らをはじめ、常任理事の方の手により失地回復に努めている。この会報と相前後して発行されると思う。

名簿のスタイルは旧制府立高校同窓会名簿とあわせた。会則もほぼ同じものが総会で承認された。これらの意味は、将来二つの同窓会を合併させることにある。一、二期生は、旧制高校の最後のニクラスに当り、オーバーラップしている。私は旧制府立高校同窓会の理事をしているが、理事会でも時

時両同窓会合併問題が話題となる。合併による得失を充分に考え、一応、合併の線に進もうと私個人は考えている。会員皆様のご意見を伺いたい。

総会で新役員が承認されたことは前述の通りだが、未だ評議員の出いていないクラスがある。至急、決めて、ご連絡願いたい。理事会の互選で私が理事長に推された。

迷惑な話だが光栄だと思つて努めたい。これまたご迷惑だとは思いますが常任理事を指名させていただいた。有能な方々なので私は何もなくてもうまく運営される仕組みになつていく。

折角再建された同窓会である。皆様の手で永續きさせていただきたい。

名簿発行の遅れのお詫び

杉 浦 清 子 (10期)

名簿発行が、予定していた総会日(昨年の十月七日)より大変遅れましたことを、お詫び致します。四六年十一月に第一回の名簿委員会を設けてから、毎月一回、計七回の会合の積重ねの上に、どうやら全員の名簿の原稿が揃ったのが昨年の六月の末でした。

名簿委員の中には、一人で五クラスも担当して下さった方や、御夫婦でそれぞれのクラスを受け持つて下さった方もおり、それぞれ

忙極まりない方々ばかりです。また、学生の方々は、論文作成、試験中をおして協力していただき

また、二十期以後のゲラが委員の手に渡っていなかったりで、初校が全部集まったのが一月下旬でした。名簿委員といつても、自発的な人々の集まりなので、それぞれの担当者の立場を尊重していたために、誰かがはつきりしたりミットを決めるということができずにいた次第です。

また、索引作りは、細心の注意のいる作業ですので、受注することも思いはかられ、野口さん(四期)を中心に、二、三の人間で、何日も夜と休日作業に当て、意外と時間が掛かりました。

これらの内部的事情のほかに、外部からは、印刷費、紙費の暴騰紙不足等に見まわれ、ともかくにも、難産ながら、やっと発行することができ、一年半に渡つた作業に不十分ながら一応区切りがつき、ホッと致しました。

私事ですが、名簿作りを通じて齋先生はじめ、優秀な先輩、後輩を知り、人間的なつながりを得たことは、私にとって大変プラスになりました。

不備の点、多々あると思います。お気付きの点、また、新しい情報、移転等を同窓会あて、電話ハガキでお知らせ下さいませよう。お願い致します。

お願い致します。

転出にあたってのあいさつ

昨年度をもって、都立大学附属高校から転出された先生方に寄稿していただきました。

附属高校を去るに当って

安岡善則

昭和四十五年十二月校長に任命せられて、三年四月、どうやら校長の職を務めて、この度退任し、後任として、都立大学人文学部の三浦武教授(実験心理学講座担当)を迎えました。その間四度卒業生を送りました。思えば紛争の余塵まだくすぶっているときに校長を引き受けて、都立大学の同僚諸君からよく引き受けたと言われまして、旧制の都立高等学校から附属高校の創立と、それ以来の附属高校の歩みを蔭ながら見つめて来た私としては、わりとすんなりと附属高校に融けこむことが出来ました。その間先生方の暖かい協力と、今は同窓生となっているが、在任中の在学生諸君の平静を迎え入れによって落ちついて務めを果すことが出来たことを感謝してい

ます。その後多少の波瀾もあり、連も立ったにせよ、附属高校は少しづつ、落ちついて来ているように思います。古川前校長が、その在任中を附属高校の「どん底」と言われた言葉は私に心にしみて受けとめましたが、それが果して「どん底」というものかと疑問に感じつゝ、しかし、現象面としての低迷の時代を脱却して、少しでも良い方向に立ちなおろうと微力を尽したつもりでありませんが、非才十分にその任を全うすることが出来ず残念に思っています。

今後の附属高校に望まれることは、先輩である同窓生諸君が、創立以来、旧制高校の伝統を受けついで築いて来た校風、自主性を主柱とする真の自由と自治をとりも

とすことであると考えて居ります。ともすれば放縦とはきちがえられがちな無規律な自由、義務の観念に先行されない自由を深刻に反省し自らを立て直して行くことであります。幸い落ちついた学園の雰

A君の話

A君はあまり授業に出なくなつた。沼津のクラス合宿に始めて行って、先輩の教えを忠実に守り、二級酒を飲んで酔いつぶれた。その時担任にいらされたのがケチのつき始めであった。朝めしを食わずに満員電車にもまれてくると、たいいてい一時間目は始まっている。そこで足は校舎にむかうかわりにモーニングサービスつきのコーヒー店にむいてしまう。朝のたばこが腹にしみわたる。欠時数の計算をそろそろきちんとしておかなければ

困気をとりもどしつゝ、あるこの明るい時に附属高校を去ることの出来ることは、私にとって幸いであります。そのような気運の中で校舎、プールおよびその周辺の環境も逐次整備され、この秋頃までには一応完成して面目を一新する予定であります。先輩諸君も折りにふれて母校を訪れ、後輩を激励して下さい。幸甚に存じます。同窓生諸君の御健勝と御活躍をお祈りします。

染谷徹

ればと思う。紛争のときは、ほんとによかったと思う。シンナーを始めたのもあの頃だった。受験、受験と頭にかけている連中はこんな授業が抜けて欲しいようぶだろ。うかと本気で心配していた。あいつはヘルメットをかぶったからもうあれでおしましだという言い方もあった。A君はヘルメットはかぶらなかつたが、混乱に乗じて大いに自由を楽しんだ。仲間にはことかかない。頭のいかれたような女の子と

も適当に楽しんだ。記念祭にも大いに飲んで学校に泊りこんだ。だが、最近教室でたばこを喫っていると教師がきて怒鳴つたりする。別に管理体制の強化などといった連中に同調するわけではないけれども、やゝ窮屈になってきたという感じがする。コーヒーを飲み終つたら、坂を下つて麻雀屋に行つてみよう。いや駄目だ。午後から試験がある。どうせカンニングすればいいようなものの、誰の隣りにすわるかが問題だ。やつぱり昼に麻雀屋に行つてあいつを見つけておいた方がいい。

A君は最近オートバイにこつている。アルバイトでためた金で月賦で中古のナナハンを買った。だいたいの麻雀のつげを清算するために始めたアルバイトだが、近ごろは雀球に転向しかかっている。少々金がたまるとなった。オートバイでとぼしているときだけが、言つてみれば、現今の唯一の充実感の源泉である。もつとも、先月のように死ぬ奴が出たり、事故で入院したりする奴が出ると、親も教師も口うるさくなつてかなわぬ。将来どうやって生きて行くか、A君にはあまり見通しが立たない。A君にはその見通しもあまり必要でないのかも知れない。

先ごろ私は辞職願なるものを書きました。もちろん始めてのことですから、事務室でサンプルを借りてきて書いたわけですが、書きながらふとこんなことに気がつきました。サンプルには「東京都公立学校教員 都立 大学附属高等学校 教諭 何某」とあるのです。確か私が始めて手にした辞令にも冒頭に「東京都公立学校教員」とあったように記憶しています。

「辞職願」

松 俊 夫

のがこの「都立」という意識であったことはまぎれもない事実でした。それが教師としての私にとつて良かったか、悪かったかは私にも見当がつかみません。というよりは、これが私の生き方だったと申し上げる以外にないようです。

こんなことはごく当り前の話ですが、学校を去ろうとする今でも私には都の公立学校の教師であつたという意識がまるで稀薄なのです。なげなら、私はこの二十四年間、まさに「都立」(附属高校のことです)の教師として生きてきたから

です。もちろん都立の高校はほかにもたくさんありますし、今どき「都立」などということは自体がまことにおかしなことであることぐらいいく承知しております。しかし私の教師生活を支えていたものがこの「都立」という意識であつたことはまぎれもない事実でした。それが教師としての私にとつて良かったか、悪かったかは私にも見当がつかみません。というよりは、これが私の生き方だったと申し上げる以外にないようです。

木造校舎が消えようとして

清 沢 治

木造校舎が消えようとしている今、私の都高での四年の年月の流れも終ろうとしています。底冷えのする鉄筋校舎は、埃さえもよそよそしく、薄汚い、それにくらべ

て木造校舎は埃さえもが教室にほつとするとたまたまいもたらしていた、と言ってみても仕方ないことのようにです。都高創立以来、青年たちが仰い

ささやかなサヨナラ

病 中 片 語

くろは きよたか

「都高」十年、夢のようにすぎた、と、いいたいが、四分六分ぐらいで悪い夢をみたことが多かったと思う。この十年のあいだに、私は結婚をし、子どもをふたりももうけ、研究者として自分が生きる道

ときには、それが重荷となったこともあつた。「歴史的進歩」という大法則を語るには、私の心臓は小さすぎるからである。「都高」最後の「卒業の日」

あ あ 都 立

中 島 修 司

かの生徒諸君——そして、OB・OG諸君——と清潔な人間関係をもてたことにおいて、私は、仕合せな教師だったのかも知れないが、だといわれる樫の樹も、鉄筋校舎に挟まれて堅くちぢこまっています。やがて来る夏の日ざしも、この樫には遠慮がちにそそぐような気がしてしかたありません。世の中が変わると、太陽の光も変わるのでしょうか。

学生時代からあわせると、都立で過ごしたのは十一年だけれど、考えてみると、二十年も三十年もこの都立で生きて来たような感じがするのだ。それほど都立の暮しがすつかり身についてしまっていたのであろう。ぼくの生れ故郷は信州だが、都立はぼくにとつて、やはりふるさとといえるのである。住み慣れたなつかしい土地こそ、真のふるさとと言つてよい。さまざま記憶が、いま、ぼくの脳裏に浮かんでくる。おしよせる潮のように、ぼくの胸を切ないまで熱くする。ああ都立よ！ぼくの青春はそこにあつた。

この附属へ就職した。たしか学校群制度が始まった年である。幾多の英才を生み出した、オンボロ木造校舎。男女共学とはいえ、実に男っぽい高校だった。クラスマッチ、記念祭の後のストームの興奮、女生徒も泥んこになって高歌放吟した。附属の伝統である自治、自由、時流を超えて職員も生徒も、実に、高潔な人間たちの集団。感激の涙は、ぼくのほおをぬらすのだった。

かつて青年たちが空に吸われるように、この樫を仰ぎ、躍る陽光に夢みた夢はどこにいってしまったのだらう、という思いがつのります。

七年前、大学を出るとすぐに、窓会よ、健在なれ！

高校紛争があつた。ぼくはそれについて多くを語るまい。だが、附属の良さは、いまだ失われているわけではない。附属よ、わが同窓会よ、健在なれ！

「都立」を出てから何年になるだろう。私は第一回の卒業生だから、二十三年にもなる。日常の生活の中で自分の卒業した高校のことを考える事はほとんどといっていいくらいないのだが、ここ一カ月ばかり前、四回生の女生徒（といっても現在は目黒区内の中学校の先生をしている）から電話をいただいた。彼女の担任している生徒が、「都立大附属高校へまわされたら——現在の学校群制度では二ないし三の高校が群とよばれるチームをつくっていて、そのチームへ出願して成績（多分そうだろうと思う）によってそのどこかへ配属されることをこう云っているようである。——、泣いて泣いて困ってしまった。いま「都立」はどうなっているのでしょうか」という話であった。二十三年も前に卒業した、しかも極めて不勉強かつ学校側の受けの悪い劣等生たる私が聞かれても困ってしまうご相談である。しかも私の住所は東京の東端、江戸川区で「都立」（二十三年もたつとこの言葉にも注釈が必要だろう。私は旧制都立高校の尋常科四年から新制都立大学附属高校の二年へ編入されたのだが、都立の旧制高校は一つしかない）、旧制当時、学校は「都立」と略称

されていた。新制度になっても数年間はそのまま「都立」「都立」と呼称されてきたのである。実のところは全部が都立高校なのだからおかしな話ではあるが）は、目黒区、つまり東京区部の西のはずれである。学校の噂話をきくことも少ない。全く返答に窮した次第であった。

高校受験生（話の様子ではどうも女生徒のようである）が「泣いて泣いて」困ってしまう学校とはどんな学校なのだろう。私はいろいろと思いをめぐらしてみた。

教師のしごととは 何たるうか

高野 秀 夫（1期）

まず、第一は、東大進学率が悪い学校なのだろうか。これで女生徒は泣くだろうか。私は泣かないと思う。

第二に、左翼高校生の拠点校なのだろうか。学生運動が大衆的基礎をもち、国の政治の流れにくらかでも自分たちが関与し、歴史の秤が進歩の側に傾くように寄与しているとしたら、それで女子は泣くだろうか。高校生らしいつづらな賑を輝かし、風に向って胸

をはって歩きこそすれ、泣きはしないうか。（ただし、現在の学生運動が、甚だ遺憾ながらこのような状態にないことを私は痛い程知っている。機会があったら、高校生も含む学生運動について私は書きたいと思うが、本稿はその場ではないので割愛しておこう。）では、何故、女生徒は泣くのであらうか。

◇
そもそも教育とは何だろう。よく教育労働者という言葉をきく。

労働者には原材料が必要である。それが入学生であり、教師という労働者はその新入生に適当な加工を行なって卒業生という製品を社会または大学へ送りこむ。しかしこれで行なわれる労働は教育であり、工場で無機物に加工して新製品を世間へ送っている工場労働者とは質的に異なる特殊な「教育労働」であることは論を俟たない。教育における原材料は人間という有機物であり、しかも高校生の場合あらゆる意味で可塑性に富む青

年男女である。労働者というよりは農民に似ているかもしれない。時々私は考えている。とにかく原材料は生きており、倉庫に放置しておけば枯れてしまう有機物であり、霜や露に弱い畑の花弁のようでもある。

教育労働者の労働は農民が自ら作物をいづくしむ心づかいをとくに必要とする労働であると思う。

八時間の労働が終わったら、あるいは拘束時間が過ぎたらあとは「自由」な労働者とは一寸質を異にする労働者ではないのだろうか。雨が降れば畑の花弁に心を配り、ある時は畑へ出掛けていかなければならない農民に似ていると先刻私は書いておいた。

一方、教師は校長の名において「高校卒」という資格を生徒に与える「認可権」をもつ一種の行政官僚でもある。どうもこの官僚という言葉にはよくないニュアンスがあつて、教師諸氏は官僚だといわれると一種の拒絶反応を示すかもしれないが、れつきとした行政官僚ではないだろうか。

自分の原材料が有機物であることを忘れ、労働時間が終ればその有機物への心配りを忘れてしまっている先生はいないのだろうか。「都立」へまわされた女生徒の泣

き声は、倉庫で枯れかかっている花弁の声ではないのだろうか。時間が来たので帰宅を急ぐ役人への怨嗟の声ではないのだろうか。

「都立」へ配属された女の子が泣きに泣かなくするためにどうしたらよいか、現役教師諸氏の論議を私は期待しなくて、わざわざ独断的に筆を運んだといわれてもよい。

ともかく、学校は死にかけている。蘇生の途を同窓会の紙上で多くの人々が論じあうことを私は提案して筆を擱こう。

松岡大和展に際しましては、並々ならぬ御協力を賜り、誠に有難うございました。尚、作品集はまだ残りがありませんので、御希望の方は左記住所へお問合せ下さい。

港区西麻布二一〇一
九 小山ビル七〇二
（株）オーエンタープライズ
TEL 四七八一四六三九番
昭和四十九年一月

松岡大和展後援会
事務局